

巻頭言

雑談的意見

藤田保健衛生大学総合医科学研究所
富田忠雄

九大理学部生物の初代教授（瀨尾，小島）は九大医学部生理学教室の同門会員である。理学部が新設された時，東大から赴任され暫く生理で研究をされていたそうである。私が生理に入った頃，理学部に動物学教室が新設されたが，桑原教授（北大より赴任）も教室が完成するまで暫く生理の方で研究され，その後も行き続いて生理で合同セミナーが定期的に開かれていた。また，教室には以前に遺伝の研究に使われた金魚が標本瓶に並んでいたし，第二生理の瀨尾教授は時間感覚という実験心理の研究をされていて，時には哲学的な話を聞かされた。このように，生理学は非常に学問の幅が広いもので，また，いろんな専門分野が生理学から分かれていったことが体験的にも強く感じられた。その後も生物物理や神経科学などの関連分野の学会が設立され，それぞれ立派に育ってきつつある。

生体の機能の分析という広い意味での生理学は細分化されながら，また多くの学部に分散しながら益々発展しているといえる。しかし，本家である（自意識過剰？）医学部の生理学教室やそれを母体とした生理学会はいくつかの問題を抱えているようである。主なものとしては他の活発な分野に較べて優秀な若い人を惹き付ける魅力が足りなくなっていることであろう。研究内容があまりにも細分化され過ぎて，面白味が少なくなったり，指導的立場の生理学者が狭い領域の知識しか持ち得ず，小粒な感じになって人間的魅力も乏しくなっているのも原因の一つかも知れない。

30数年前にロンドンの Guy's Hospital に就職のための面接に行ったとき，生理の N. Hunt 教授（消化管生理）が内科の臨床検討会にしばしば出席して，広い範囲の生理学的見地からいろいろ意見を述べられるのに感心したり，驚異を感じたりしたが，今になって考えると医学部生理学の教授程度の人はいくとも専門に近い臨床領域の勉強をする努力がもっと必要であるような気がしてならない。脳死の問題などについても生理学者から積極的な発言があつてしかるべきだと思われる。このような態度が長い目でみれば，大なり小なり研究に影響を与え，生理学についてより多くの人に興味を感じさせ，若い人を惹き付けることにも繋がるのではないだろうか。しかし，医学部出身の後継者不足の状態を改善するのは大変難しく，この傾向は益々強くなることも予測される。それで，むしろ他学部から優秀な人材を集め，研究者としてだけでなく立派な教育者として養成していくことも考慮すべきであろう。問田直幹九大名誉教授は随分前にこの点を指摘され，医学部に修

士課程を設けるよう提案されている（日本医師会誌，59：753—757，1968）。なお，教育者養成として考えた場合，人体解剖の実習を初期の段階で行うことも一つの重要な過程ではないかと考えられる。順天堂大学では実際に基礎の教育者を対象に実施されているとのことである。

医学部における生理学教育に関する積極的な意見は特に持ち合わせていない。しかし，知識を与えることも大切であるが，原理的なものを理解させたり，何かに興味を持たせることの方を重視すべきであろう。これには当然ながら小人数でのセミナー形式が有効である。なお，教育には臨床の人材を大いに活用したら良いと思われる。Guy's Hospital に行ったとき呼吸生理の授業が行われていて，内科の講師級の人が担当していて大変良い講義をしていたが，日本では生理学教室の規模が小さくて人材が不足しているので，臨床の人を積極的に生理学の教育に活用したら良いのではないだろうか。どこの大学でも臨床には生理学を教育するのに相応しい大勢の人がいるはずで，臨床生理に偏ったとしても，より立派な内容の教育が行える可能性が考えられる。